２００８、７、２８

第５５回北海道作文教育研究渡島・函館大会

７分科会「生活綴方の歴史と理論」資料提供

大野文化財保護研究会（文保研・ぶんぽけん）
会長　木下寿実夫

テーマ「木村文助と綴り方教育」
～つづり方という郷土史を後世へ～

１、郷土史研究団体の動き

大野町文化財保護研究会は昭和４７年・１９７２年に設立した。主として大野町内の文化財保護、郷土史の掘り起こしを目的に『大野町史』作成に携わったメンバーが会の中心となり活動を開始した。初期の活動は文化財保護条例の制定を求めたり、史跡に標柱や説明板を建てたことだ。活動の成果は住民へ還元することを心がけた。具体的には講演会を開いたり、会報・冊子を作ったりした。

史跡説明板は後に町教委へ移管され２０数年経過した今民間のも含め大野地区内１０９基建ち、ふるさとの紹介に役立っている。

現在続けている事業は、月例会、会報発行、箱館戦争戦死者追悼会、道南を巡る見学会、文化講演会、市教委との文化財懇談会、要請活動、史跡案内、親睦会等で、北斗市の大野地区を中心に上磯地区、函館市の会員６０人で構成している。

２、木村文助の実践資料収集へ

大正から昭和にかけての１９２０年代、大野尋常高等小学校が生活綴り方で一世を風靡したと伝え聞いていた。文保研設立の２年前、昭和４５年・１９７０年発行の町史には、大野小学校（校長木村文助）は渡島管内の赤い鳥の本山、と若干触れてはいるものの深く突っ込む余裕がなかったようだ。

一方それ以前の昭和３０年代に発行された『北海道教育史』（道教委・道研究所）・６巻を調べて驚いた。大野小、砂原小で校長兼訓導だった木村文助の実践が各所に載っていたことだ。

木村の実践記録の収集は遅々たるものだったが、本格的に開始したのは平成８年・１９９６年からであった。町内はもとより各地から赤い鳥社の出版本、研究論文、研究者の新聞掲載記事など多数寄せられた。

３、講演会・展示会などの積み上げ

１９９７年、砂原町史を執筆していた荒木恵吾編集長が木村を調べていたこともあり、講師をお願いして最初の講演会「赤い鳥と生活綴り方文集村の子供」を開いた。大きく新聞に取り上げられ、小・中・高・大の先生や教え子らが聴講した。

２００２年、京都仏教大学岡屋昭雄氏による講演会「木村文助の人となりと綴り方教育」を開き町民、郷土史家、教員などが聴講した。綴り方と修身との関連、青年教育にも尽力したことなど話された。

２００７年、札幌の平中忠信氏の講演会「木村文助先生の綴り方指導」を開き教え子の立場から戦前の札幌での実践模様が語られた。

なお三氏の講演は冊子になり保存されている。

文化祭や節目に展示会を何回か開き、綴り方を指導した木村文助の名が８０年近く経て町（市）民に徐徐に浸透しつつある。

４、「赤い鳥」へ投稿　復刻版購入

大正７年・１９１８年、月刊児童雑誌「赤い鳥」（主宰鈴木三重吉）が東京から発刊され全国から綴り方などの児童作品を募集した。その年に木村文助は赴任した。彼の指導のもと、大正１１年から投稿し毎号のように入選し、昭和４年・１９２９年までトータルして５９編にもなった。他校を圧倒したのだった。

「赤い鳥」復刻版が発刊され、３０年も経過した平成１１年・１９９９年、古書店から会員らの寄付で１９５巻全巻を購入し町教委へ寄贈した。

町教委とタイアップし早速展示公開したところ、８０歳代の女性教え子が見え懐かしそうだった。その中で入選者の一人赤井千代さんは復刻版購入を強く期待していたことから私の手を強く握り締めた。

５、「赤い鳥・木村文助」コーナー設置へ

２０００年、町郷土資料室の小さな一室に本は収まり「赤い鳥・木村文助」コーナーが整った。同年文保研では「木村文助研究通信」を発行し年２回のペースで現在も続け１７号に至っている。

２００１年には『砂原町史』が発刊され木村の実践が多くのページを割き町史本文はもとより年表、写真集にも載り、先を越された感を持った。

資料も次第に集まり手狭になっていたところ、２００２年郷土資料室の広い部屋が空き町教委はコーナーを移設した。そして現郷土資料館前の校長住宅跡へ説明板を建てた。

さらに町教委では２００２年、「教育広報おおの」に「赤い鳥」に載った綴り方

の連載を開始した。２００６年大野町は、上磯町と合併したが北斗市「教育広報きらめき」に連載は復活した。１９２０年代の綴り方を読んだ市民（旧上磯町）は「すごい」と驚きの声を寄せたという。

６、学校経営・・教育要覧より

昭和２年頃の「教育要覧」を見ると経営の概要が伺える。１１枚の写真には５枚が赤い鳥入選者で占めている。

「一」　の一般には、寄付による文庫の開設、同窓会の実践、高等科二年の村内視察などの項目がある。

「二」　の教科には、綴り方に関係する部分が次のように載っている。

（一）修身

一、児童の自覚を促し自律に待つ。特に綴方と連絡をなし、健全、公正なる道徳観の養成に資する。

（四）綴方

一、月一回優秀なるものを印刷し全級児童に配布し又教務係に提出す。係は是を体操場に掲げ全校児童に見せしむ。

一、方言は会話中に入るるも、叙述には力（つと）めて之を避（さ）く。但し語彙を有せざる時は許す。

一、當校児童文集「村の子供」を尋四以上に配布す。

７、木村先生の指導とは・・三段階指導

三段階指導法、つまり児童の力量を踏まえステップさせる指導を採用した。教科書の文章を書き取らせれる、見るまま聞こえるまま書かせる、自由に書かせる。

「赤い鳥」の方針でもあり方言が入ってもいい、ありのまま書くよう進めた。書いた文は文団・グループで誤字など指摘し合い、清書し皆の前で読ませた。木村は自ら高等科女子の指導に当たると供に他の先生の指導も奨励した。先生が直接文章を手直しする事は避けた。

大正１３年・１９２４年の謄写印刷に続いて昭和２年・１９２７年東京から活版で『綴方生活　村の子供』を発刊した。「赤い鳥」入選作と校内入選作、そして木村の論文が載り大きな反響を呼んだ。昭和３年・１９２８年、木村は砂原小へ異動した。

砂原小で大野小、砂原小、他校の綴り方を載せた『村落児童文選』（昭和５年・１９３０年）を発刊、そして高等科生共同作『漁業職業の全貌』発刊という快挙を成し遂げた。

８、資料の活用を・・資料館へ

２００６年、『新大野町史』が発刊され木村や綴り方は通史、教育、文化（財）、人物、年表等の各所に掲載された。特に大野小の「赤い鳥」全入選者が紹介されて

いる。

２００７年「『村の子供』発刊８０周年＆木村文助没後５５年」記念事業を催した。札幌の平中忠信氏の講演、展示会、文助墓碑墓参（森町）などを内容とした。そしてコーナーも一新した。記念事業に際し文助の子息で苫小牧在住の木村好氏より貴重な文助編著『村の子供』、『村の綴り方』、『悩みの修身』の原本が寄贈され、感慨一入だった。

現在「赤い鳥」、木村の編著など３００点ほどの資料を棚に供えまた展示している。綴り方１６８点を読むことが出来る。

木村の親族が見え、市民が訪れる。教育大岩見沢校の学生はコーナーの資料を具に調べ卒業論文に仕上げた。

○　私たちの役目は先人の文化遺産を発掘し保存していくことである。それが公開され多くの人の目にすることが望ましい。

木村の著書や子供たちの綴り方が後世に伝えられ、教育研究や実践に役立てばこの上ない喜びである。

＊　２００２年放送のＳＴＶラジオ「木村文助」２３分のテープ持参

木村著書

『村の綴り方』昭和４年・Ｐ４７７

『悩みの修身』昭和７年・Ｐ４３９

『母の綴り方』昭和１５年（子息不二男と共著）・Ｐ３３５

滑川道夫『日本作文綴方教育史』昭和５８年（Ｐ２５２～２８４）

岡屋昭雄『北海道国語教育史の研究―木村文助の場合―』平成１０年

北斗市郷土資料館（大野小学校隣）

北斗市本町２００

TEL（０１３８）７７－６６８１

開　館　平　　日　８：３０～１７：００

土・日・祝　９：００～１６：００